

天からのパン

出エジプト記 16 : 2 - 4、9 - 15



司祭 ヨハネ 井田 泉

2021年8月1日
聖霊降臨後第10主日
上野聖ヨハネ教会にて

「主はモーセに言われた。『見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。』 出エジプト記 16:4

今日の旧約聖書は、遠い昔、イスラエルの民がエジプトを脱出して約束の地まで長い旅をしたとき、神さまが彼らにマナという食べ物を与えられたことを伝えるものでした。

彼らが奴隷の家と呼んだエジプトからの脱出は、大きな感動と神への感謝の出来事でした。しかしそこから始まった約束の地に向けての旅は、たちまちさまざまな困難に襲われました。今日の出エジプト記第 16 章に描かれているのは、食べ物の不足、飢餓の危機です。

今日の本文はこう始まっていました。

「荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた。イスラエルの人々は彼らに言った。『我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。』」 出エジプト記 16:2-3

今、イスラエルの人々全体から非難を浴びせられているモーセとアロンはどうしたらよいのでしょうか。神さまに強いられて、皆を救い出すために命をかけてここまで来たのに。

このとき、神は人々の不平が実はご自分に向けられていることを知って、モーセにこう言われました。

「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す」。

翌朝、宿営の周りには露が降りました。露が蒸発すると——こう書いてあります。

「見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。

『これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。』」出エジプト記 14-15

毎朝天から与えられるこの食べ物「マナ」と呼ばれました。ところで、ここで注意すべきことがあります。

第一に、そのマナは神さまが、人々を生かすために、必ず目的の地までたどり着くことができるために、与えてくださったも

のだ、ということです。神が養ってくださる。人は神からいただくマナによって生き抜いていく。わたしたちもそうです。

第二に、そのマナは、朝ごと日ごとに与えられるものであって、人々はそれを毎日、その日必要な分だけ集めて、それを食べて生きていく、ということです。まさに「日ごとの糧」です。

この物語は、わたしには自分の身に覚えがある話です。そのことを少しお話しします。

わたしは 40 数年前の神学生時代に、神さまを見失いました。信じたいけれども確信が持てない。信じる力が自分の中にはない。けれども神にすぎる以外に道はない——そういう状態に陥って、それがずっと続きました。神学校卒業までにこの不信仰と疑いの泥沼から引き上げてください、信仰を与えてくださいと、毎日毎日祈りました。

古今聖歌集 225 「^な汝が心をささげよ」という聖歌があります。現行聖歌集の 503 で歌詞が変わりましたが、以前の 2 節はこういう歌詞でした。

「♪ 疑いと罪の沼、悲しみの深みより、主よ、引き上げたまえや。わが心を みもとに」

これがわたしの思いそのものでした。

そのままの状態で神学校卒業の日を迎え、不安と不信仰と迷いを抱えたままで最初の教会に赴任することになったのです。

今から 44 年前、当時わたしは 27 歳、独身。何の経験もないのに、教会だけではなく、いきなり幼稚園の事務だけではなく園長代理をさせられる羽目になりました。自分の内には不信仰と迷いを抱えつつ、しかし毎日の仕事、次々に起こっている事柄に対処しなければなりません。そのとき、わたしにとってはこのマナの話は切実なものだったのです。

自分には力がない。信仰がない。1 年分の力どころか、1 月、1 週間分、数日分の力もないのです。それでただその日 1 日を生きて働けるだけの信仰、1 日分だけの力を神さまに祈り求めて、毎日そのようにして、何とか 1 年を生き延びた。これが神学校を出て最初の年でした。

毎日毎日が危機的でしたが、逆に言えばこういうわたしを神さまは、不信仰を抱えたままで、力のないままで、日ごとの糧によって生かしてくださった、日ごとのマナで生き延びさせてくださったのです。

その日ごとのマナというのは何であったかと言えば、聖書を読むことと祈ることでした。朝、聖書を読んでその中の一言を心にとめて、紙に書いてそれを 1 日の支えにして生きる。その日だけの分で結構ですから、今日生きて働けるだけの信仰をお与えくださいと祈りました。

そのようにして過ごしているうちに、聖書の言葉が日ごとに自分の命となることを経験し、また1年、2年と経つうちに、あの恐ろしい不信仰が少しずつ癒やされていって、再び神を信じることの喜びが少しずつ戻ってきました。

わたしの話はここまでとして、今日ご一緒に心にとめたいのは、先ほど言いました二つのことです。

第一に、神さまはわたしたちの人生の歩みに決して無関心ではなく、わたしたちを生かし、必ず目的地までたどり着くことができるように支え、養い、導いてくださる、ということです。

第二に、神さまは、朝ごと日ごとにわたしたちに命と力を与えようとしておられる、ということです。あのマナをいただくようになったイスラエルの民の中には、毎日毎朝マナを集めるのは面倒なので二、三日分を一度に集めておいた人がいました。そうすれば楽することができると思ったのです。ところが集めて残しておいたマナは、翌日になると虫が付いて臭くなっていました（出エジプト記 16:20）。

信仰は生きたもの、言わば生ものです。放置すれば腐ってしまう、あるいはひからびてしまう。1日一度は聖書を開いて、一つの言葉を素朴に心にとめるのです。そして自分のため、また人のために祈ります。教会のために祈ります。このことを皆さんが実行するなら、一人ひとりの信仰に喜びが起こり、教会は

成長するでしょう。

今日、何の言葉をマナとしていただきましょうか。今日の福音書の最後、ヨハネ福音書第6章35節。

「わたしが命のパンである。」

イエスはわたしたちにご自身を提供しようとしておられます。わたしたちを養おうとしておられます。命であるイエスさまをいただきましょう。

祈ります。

主イエスさま、日ごとにわたしたちを養ってください。あなたご自身の命をいただいて、この人生の旅路をしっかりと歩むわたしたちにしてください。アーメン